

「かわさき・子どもの生活実態調査」

- 今、川崎の子どもたちは -

教育課題研究室指導主事研究会議

平成14年度 河野 勝彦 佐藤 裕之 篠原 満 鉄指美登利

行川 博幸¹ 高橋 邦夫² 北西真知子³

平成15年度 江間 薫 河野 勝彦 佐藤 裕之 篠原 満 矢野 君江

主題設定の理由

今日の国際化、情報化、科学技術の発展、少子高齢化などの急激な社会変化の中、子どもが生活している家庭においては、ライフ・スタイルも大きく変容してきている。一方、地域においても、都市化の進行や連帯感の希薄化などから地縁的な地域社会の教育力が低下していることが危惧されている。こうした子どもを取り巻く環境が変化してきている中、家庭、地域、学校において子どもがどのような生活を送っているのかを知り、その実態に応じた教育の課題を明確にして、それぞれが有機的に連携することが必要である。

そこで、川崎市の子どもの家庭、地域、学校での人間関係や自由な時間の過ごし方、金銭の使い方、生活の状況や体験活動等の実態を明らかにするために、子どもの生活実態調査を実施することとした。そして、この調査結果をこれからの本市の学校教育等の充実に向けた基礎資料とするとともに、各学校の教育活動や本市の教育施策に生かしたり、総合教育センターの研究の基礎資料として活用したりすることを目的として主題を設定した。

研究の内容

調査結果を「かわさき・子どもの生活実態調査 - 今、川崎の子どもたちは - 」として冊子にまとめ、市立学校（園）や社会教育施設等に配付する。

1 調査研究の方法

(1) 調査項目の構成

調査票は、小学生、中学生、高校生ともに共通の調査項目とした。その内容は、家庭に関する設問を20問、地域に関する設問を8問、学校に関する設問を12問とし、計40問で構成した。

(2) 調査対象

川崎市立小学校 3年生（12校、1,119名） 5年生（12校、1,058名）

川崎市立中学校 2年生（4校、1,013名）

川崎市立高等学校 2年生（3校、616名） 合計3,806名（当該学年で全市約30,400名の12.5%）

(3) 実施時期

平成15年2月3日（月）～28日（金）

(4) 調査方法

抽出校

小・中学校については、学校を単位として地域の環境（住宅地域、商業地域、工業地域など）に偏りがないように検討して抽出校を決定した。高等学校については、同じく学校を単位としたが、市立高校5校の中から、概ね市内在住の生徒が多い普通科高校3校を抽出した。

調査票の記入等

¹教科教育研究室（研修指導主事） ²情報教育研究室（研修指導主事） ³教育相談センター（研修指導主事）

調査票は、各学級において担任が子どもに配付し、教室内で記入し回収した。

2 調査の内容

家庭、地域、学校における子どもの姿を設問の内容に応じていくつかの視点を設定し、その視点に沿って探ることとした。

(1) 家庭における子どもの姿

子どもの虐待やネグレクトの増加、しつけや基本的な生活習慣等の家庭における教育力の低下など、子どもの家庭内での様々な問題がニュース等で報じられている。また、家庭における教育観や価値観、生活環境等の多様化、学校週5日制の導入に伴い、子どもたちの家庭での生活状況も変化してきている。ここでは、家庭における子どもたちの姿を「家族との関係」「おこづかいの額と使い道」「家庭での時間の過ごし方」「学校週5日制と家庭生活」に視点を当てて探っていく。

(2) 地域における子どもの姿

都市化や少子高齢化、地域における人間関係の希薄化等が進み、地域の人々と子どもたちとのかわりや地域での体験が少なくなっている。ここでは、地域における子どもたちの姿を、「休日の過ごし方」「生活経験」「地域における活動状況」「地域への好感度」に視点を当てて探っていく。

(3) 学校における子どもの姿

いじめや不登校、いわゆる学級崩壊など、学校をめぐる様々な問題が依然として後を絶たない。さらに学習面においては、学力低下や学習意欲の低下が論議されている状況にある。ここでは、学校生活における子どもたちの姿を、「学校生活の楽しさ」「きまりについての意識」「授業内容の理解や学習への取組」「学校生活の様子」「諸活動への取組状況」「友だち、教師との関係」に視点を当てて探っていく。

3 調査の結果

(1) 家庭における子どもの姿

「家族との関係」に関する設問「あなたは、ふだん友だちのことについて、家の人とよく話をしますか」では、図1のような調査結果となった。小3、小5では、「よくする」と「ときどきする」を合わせると8割を超え、多くの子どもが友だちのことを家の人に話している。また、中2、高2でも、その割合は10ポイント

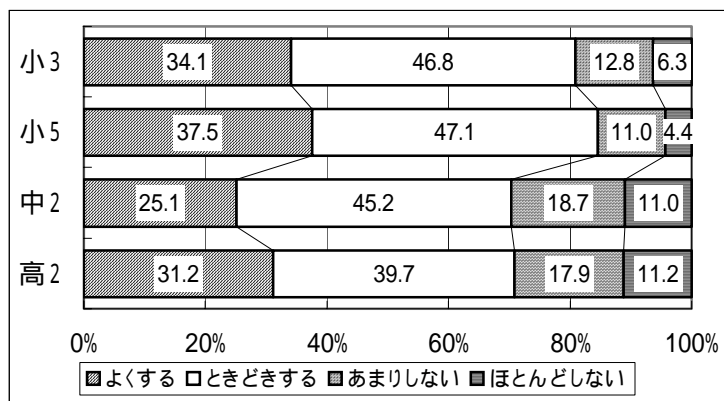


図1 あなたは、ふだん友だちのことについて、家の人とよく話をしますか。

程度減ってはいるものの、それでもほぼ7割の子どもが、家の人に友だちのことを話している様子がうかがえる。

一方、「あまりしない」と「ほとんどしない」に回答した子どもに着目すると、小3に比較して中2、高2では、その割合がほぼ10ポイント程度高くなっている。

家庭における子どもの姿を探った調査結果から、日頃から家族とよく話したり、一緒に外出したりする機会が多く、家族のことを肯定的に受け止め、良好な家庭環境の中で生活している子どもが多い。また、最近話題となっている携帯電話等の所有率と使用料については、高2でほとんどが所有していることや学年が進むとともに使用料が高額となっている。学校週5日制となり、子どもの自由になる時間がある程度確保されている状況にあるが、学年が進むとともに家庭での勉強時間は急激に減少しており、家庭が勉強をする場ではなくなっているなどの実態が明らかとなった。

(2) 地域における子どもの姿

「地域との関係」に関する設問「あなたは、今、生活している町や地域が好きですか」では、図2のような調査結果となった。

「好き」と「まあまあ好き」を合わせると、すべての学年で8割を超えており、「今、生活している町や地域」を肯定的に受け止めている子どもが多い。学年によって、「今、生活している町や地域」のとらえ方に多少の違いがあるが、中2では「好き」が24.1%で、高2の35.9%よりも11.8ポイント低い。また、「あまり好きではない」と「きらい」を合わせると、小3の7.0%、小5の9.7%、高2の12.6%と比較して、中2では16.5%と最も高い。この結果から、中2では他の学年と比較して「今、生活している町や地域」に対しての好感度が、若干低い傾向にある。

家庭における子どもの姿を探った調査結果から、今、生活している町に対しては、ほとんどの子どもが肯定的に受け止め、愛着をもっている。しかし、地域の行事への参加や地域の施設等の利用については、学年が進むとともに低くなり、地域の人とのかかわりも希薄になる傾向にあることなどが明らかとなった。

(3) 学校における子どもの姿

「学校との関係」に関する設問「あなたは、学校での生活は楽しいですか」では、図3のような調査結果となった。

学校での生活が「とても楽しい」は、小3が55.6%、小5が43.9%でほぼ2人に1人となっているのに対して、中2、高2では、それぞれ24.5%、26.6%と、ほぼ4人に1人である。さらに、「まあまあ楽しい」を合わせると、小3では91.3%、小5では88.7%となり、ほぼ9割の子どもが学校生活を楽しんでいる。また、中2、高2でも、この割合がそれぞれ79.5%、80.2%となり、ほぼ8割の子どもが同様に受け止めている。

図4は、平成13年度文部科学省の委嘱で子どもの体験活動研究会が全国的に実施した「地域の教育力の充実に向けた実態・意識調査」の中で同様の設問に対する回答結果である。図3と比較すると、学

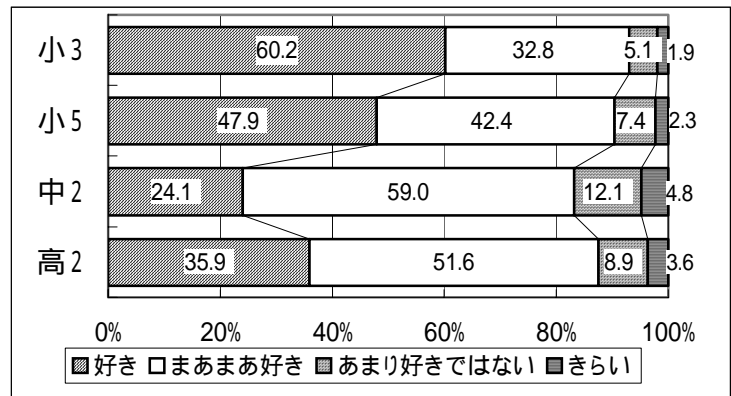


図2 あなたは、今、生活している町や地域が好きですか。

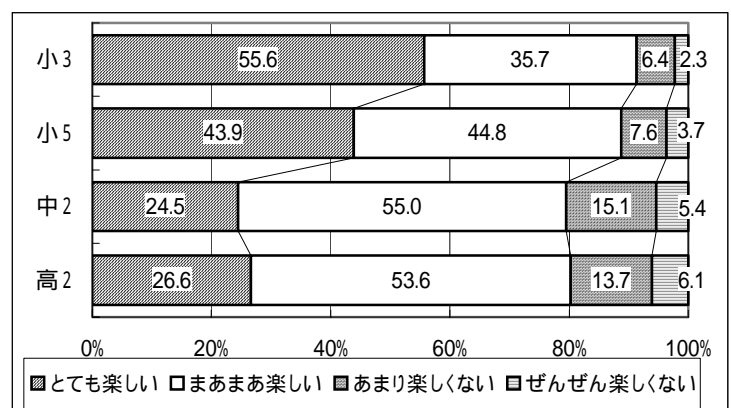


図3 あなたは、学校での生活は楽しいですか。

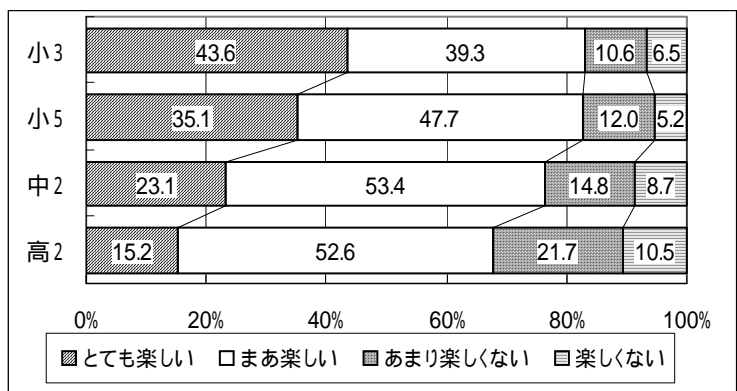


図4 平成13年度文部科学省委嘱調査

校での生活が「とても楽しい」は、川崎市の方が小3で12.0ポイント、小5で8.8ポイント、中2で1.4ポイント、高2では11.4ポイント、それぞれ全国の調査結果より高い。一方、「ぜんぜん楽しく

ない(楽しくない)」と回答した子どもの割合も、全ての学年において低くなっており、全国と比較して「学校生活が楽しい」と感じている子どもは川崎市の方が多いことが分かる。

学校における子どもの姿を探った調査結果から、全体的に学校生活が楽しいと受け止めている子どもが多い。その要因として友だちと話したり、遊んだりすることを挙げている子どもが多く、子どもにとって、友だちの存在が大きいことを改めて知らされる結果となった。また、小3、小5では、ほとんどが授業の内容を理解していると思っているが、中2、高2では、理解できていないと思っている子どもが増加している。そして、学年が進むとともに、授業内容が分からないときには、そのままにしてしまう傾向が強くなることなども明らかになった。

研究のまとめ

1 子どもの生活環境を整えるための課題

(1) 家庭

平成13年(2001年)4月に施行された「川崎市子どもの権利に関する条例」の前文に、「子どもは、その権利が保障される中で、豊かな子ども時代を過ごすことができる」とある。家庭は子どもにとって、生活の基盤とも言うべき場であり、愛情と理解をもってはぐくまれ、安心して自分を発揮できる場であればならない。子どもは家族の温かさや深い絆に支えられて日々生活し、基本的な生活習慣、思いやり、互いに助け合う心などを学んでいくものである。そこで、一人一人の子どもが家族と過ごすことが楽しいと実感でき、家庭が心安らぐ居場所として「豊かな子ども時代」を過ごせるように、生活環境を整えていくことが課題となる。

そこで、家庭においては、学校週5日制に伴い増加した子どもの自由時間の過ごし方や家族とのかわり方などについて、よく話し合い、体験や人とのかわりを大切に活動を一層増やしていくことを期待したい。一方、学校においては、これまで以上に子ども一人一人の生活環境や家庭の状況を的確に把握するように努め、保護者と連携しながら健康で充実した家庭生活を過ごすための指導を重ねていくことが大切である。

(2) 地域

地域は子どもにとって、友だちと遊ぶ場であるとともに、地域の人々を含む環境の中で、豊かな人間関係を体験する場である。また、学校内では得ることができない教育資源や学習環境が存在する学習の場でもある。そこには、乳児から高齢者までの幅広い年齢の人々や様々な職業の人々が生活し、家庭や学校だけでは獲得することができない学びがある。地域は、子どもが多様な人々との豊かな人間関係を体験し、大人とともに社会を構成する一員として成長する場でもある。そこで、子どもが思う存分活動できる安全な環境を整えるとともに、地域の文化・スポーツ活動や行事などに、大人のパートナーとして子どもが積極的に参画できる機会を増やしていくことがこれからの課題となる。地域での生活を通して、子ども一人一人が自分への自信をもち、地域への愛着を強め、よりよい地域の一員として成長することを期待したい。

そこで、地域においては、子ども自身が地域の一員としての実感が味わえ、自信をもって暮らしていける地域の環境を整えていく必要がある。一方、学校においては、地域における学校の役割を再認識し、地域と協働した行事や学校外における奉仕活動や体験活動を実施していくことが大切である。

(3) 学校

学校は、子どもが育ち、学ぶ施設の一つとして重要な役割があり、日々の授業を通して、一人一人の子どもが問題解決能力を身に付け、学びの充足感を味わうことができる場でありたい。そこで、子どもの興味・関心と結び付いた学習課題を設定し、友だちと一緒に調べたり、追究したりするなど学

ぶ楽しさを実感するとともに、達成感や成就感を味わいながら内発的な学習意欲を高めることが必要である。また、一人一人の子どもの居場所や友だちと協力して活動する場などが保障される環境を整えることも大切な課題の一つである。

そこで、子どもが育ち学ぶ場としての学校では、学ぶ楽しさを実感するとともに、望ましい集団の中で自己実現が図れるように取り組みたい。そのために、学校としては安心して学校生活を送ることができるための人間関係づくりや、他者と協力、協調して活動する機会を意図的に設定しながら、教師の適切な指導のもと内発的な学習意欲を育て、生きる喜びを味わわせることが大切になる。

2 「かわさき・子どもの生活実態調査」の活用状況

今後の研究に生かすために、平成15年12月に発行した「かわさき・子どもの生活実態調査」(図5)の冊子の活用状況についての調査を実施した。

調査内容は、冊子の活用状況のほか、冊子の中で特に印象に残った事柄や内容、冊子の中で疑問な点、冊子についての感想、今後、センターで調査研究してほしい事柄や意見、要望などである。

(1) 冊子活用の状況(全市180校(園)のうち125校、回答率69.4%)

アンケートに回答したすべての学校(園)において、何らかの場で活用されたことが分かった。

各学校の活用状況は図6のとおり「学年会」での活用が最も多く、ついで「児童生徒指導部会」となり、それぞれ5割を超えている。「学校教育推進会議」は21校で全体の16.8%である。

校種別では、幼稚園・小学校において「学年会」での活用が最も多かったのに対して、中学校・高等学校・聾養護学校では「生徒指導部会」での活用が最も多くなっている。「その他」の活用例では、学校便りや学年便り、PTAの実行委員会や総会、学校説明会、成人学級等の資料などがある。中学校では、地域教育会議での活用が多い。また、朝食の摂取状況や就寝時刻の結果を学校保健委員会や健康教育に活用した学校もある。

(2) 冊子についての感想など

冊子の中で特に印象に残った事柄や内容

家庭での生活に関する内容では、特に印象に残ったこととして携帯電話の所有率の高さが最も多く、ついで就寝時刻が遅くなっていること、家庭での学習時間が少ないことなどであった。

地域での生活に関する内容では、自分の町を肯定的にとらえていること、地域の団体の加入率や施設の利用率、行事の参加率などから地域との関係が薄くなっていることなどがあつた。

学校での生活に関する内容では、授業の分からない子どもが多いこと、学校を楽しんでいる子どもが多いことなどがあつた。

冊子についての感想



図5 「かわさき・子どもの生活実態調査」の表紙

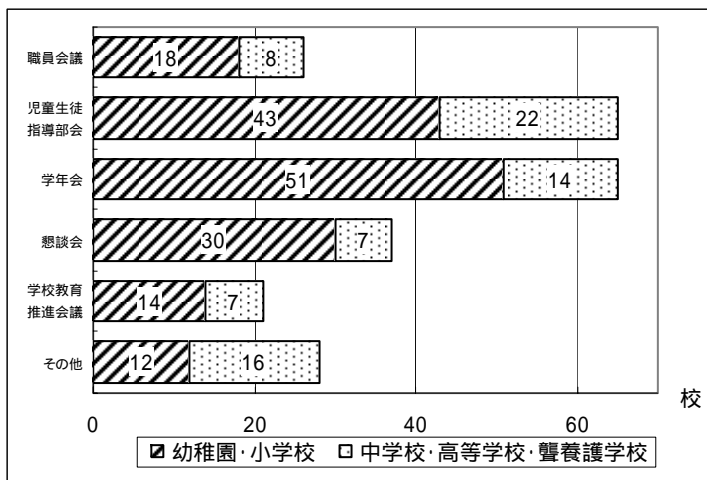


図6 「かわさき・子どもの生活実態調査」の活用状況

「保護者会や面談で子どもの生活について話題にするときの貴重な資料になる。」との感想が多く、ついで、「家庭、地域、学校での子どもの姿がよく分かり、日ごろの教育活動や児童指導に生かせる。」「漠然とした傾向ではなく、数値として子どもの実態がつかめた。」などが多かった。また、「家庭での生活に関する設問と学校での生活に関する設問などをクロス集計すると、より子どもの生活実態が鮮明になる。」という意見や「分かる授業を工夫するとともに、共感し、受容しながら指導に当たりたい。」という声もあった。

3 今後の課題

川崎市では、子どもたちの夢をはぐくむ教育を目指して、学校、家庭、地域社会が連携し、子どもの健やかな育成に取り組んでいる。地域住民が主体的な教育参加を図り、諸団体や学校と子どもの教育環境について考える「地域教育会議」は、7行政区、51中学校区で、地域の実態に応じた特色ある活動をしている。また、公募により集まった子どもたちが自主運営し、意見を表明する「川崎市子ども会議」、子どもたちの自主的な活動を支える拠点として開設した「川崎市子ども夢パーク」など、子どもが大人のよきパートナーとして活躍する場を設定している。

平成14年度から各学校に設置された「学校教育推進会議」には、「川崎市子どもの権利に関する条例」の理念を受けて子どもも参加し、地域の人々、保護者とともに学校の運営に意見を表明している。さらに、各学校においては、地域の特色を生かした豊かな体験活動や地域に住む多様な人々とのふれあいなどを通して社会性や感動する心、他者への思いやりなどの育成に努めている。

子どもは、家庭で育ち、学校で学び、地域で伸びる。子どもにとって「行きたい学校」「帰りたい家（家庭）」「住みたい町（地域）」となるように、今後も、学校、家庭、地域社会がそれぞれの役割を果たしつつ、教育の課題を共有して、川崎の子どもたちに夢をはぐくんでいきたいものである。そのためには、学校が地域教育会議、学校教育推進会議、地域の町内会などと協働し、家庭、地域社会を強く結びつけるコーディネーター的な役割を果たすことも、当面は一つの方策となるのではないだろうか。

最後に、研究を進めるに当たり適切なお助言をいただきました先生方、研究にご支援、ご助言を下さいました学校教職員の皆様に、心より感謝し厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

大場文夫（他）「新しい教育の動きに伴う学校経営についての研究」

川崎市総合教育センター学校経営研究会議	1994年
国立教育会館 社会教育研修所『家庭・学校・地域の連携・融合のすすめ』ぎょうせい	1998年
『小学校学習指導要領解説 総則編』	1999年
『中学校学習指導要領解説 総則編』	1999年
子どもの体験活動研究会『地域の教育力の充実に向けた実態・意識調査』	2002年
子どもの権利条約総合研究所『川崎発 子ども権利条例』エイデル研究所	2002年
指定都市教育研究所連盟編『教育改革の中の子どもたち』東洋館出版社	2003年

【指導助言者】

国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部総括研究官 工藤 文三
(川崎市総合教育センター専門員)